

「木箱3」 受容する箱

「このようなものは頼んではいません」と建主からいわれた経験をもつ設計者はいるだろう。いわれなくてもそのような気持ちを感じたことはあるはずだ。設計者は建主の要望なり気持ちを100%理解することはできないのだから仕方がない。現在の要望でさえわかりにくいことから、ましてや長い年月にわたってもっとも求められることとなるとさらに困難である。急激に変動する現在の社会では、設計者でさえも自分の将来の生活を特定できないでいるのだから。

人間を知るための行為として

人間の行動を観察し、生活を整理してモデル化を行う。それに従って住宅を設計する。この場合のモデル化は単純化だから対象をわかりやすくする。しかしこのような設計方法は人間のかなりの部分を切り捨てている。そして、実はその切り捨ててしまった部分が大切なのである。人びとは当初、近代建築に自由の可能性と希望を夢見た。しかしいつの頃からか「人間はこのようなものだから住宅はこうあるべきだ」という偏狭な考え方に陥った。人間の行為をすべて理解し、とらえることができると思ったことは、結果的には対象とする人間を嬢小化してしまった。それが近代建築の誤算だった。調査研究を行ってもすべてがわかったわけではなく、わからない部分は依然存在している。理解できた事実より理解できない事実の存在を知ることが重要である。理解し得ない部分があるからこそ人間は魅力的なのだ。そして住宅設計はわからない部分を扱うからこそ特異であり、意義があるのだ。理解できることだけを対象にしてつくるのでは住宅設計の主体性はない。人間との関わりを一番大切に考える住宅設計においては不明な部分をも含み得る設計法を求めるべきだ。どのようにすれば人間の想定し得ない行為に対応できる空間をつくり得るかを考えなくてはならない。住宅設計とは人間を理解してから行うものではなく、人間を知るための行為

なのかもしれない。だから建主には実験のような生活の演繹を強いることになる。しかし、それは人間の生活を扱う住宅設計だからこそ許されるべきなのである。

生活の変化を肯定する

新しい家に移れば必ず問題は起こる。長年住み慣れた家から移るのだから、起こらなければ、それは新しい家とはいえない。引越しの日にすべてが完成している必要はない。建築家のつくるべき住宅はハウスメーカーの完成した商品住宅とは違う。たとえば収納について考えてみる。引越し時にものがすべて収納される必要があるのだろうか。新しい生活が始まるのだからあらためて収納するものの必要性を考えてみればよい。コンドームの収納場所まで設計して感謝されるのだろうか。そのようなことは新しい暮らしの中で建主が工夫し、発見していくものだ。新しい住宅に住めば建主自身も変わっていく。住居は建主が徐々に自分に合わせて完成させていくものだ。自分の住居は自分自身が一番知ることになるのだから。建築家が建主の生活のすべてを見通す必要などないのである。住宅において建築家が決めると決めないこととははっきりさせればよい。時間をかけて建主の望む住居をつくり上げていけばよいのだ。ただその方法を明示することが建築家に求められている。生活は変化していくものである。だから生活の変化を肯定的に見て、多様な生活を見通したいと思う。生活の変化をどれだけその住宅が受容し得ているかが問題である。人間の可能性を認めて許容範囲の広い住宅を求めたい。無性格な空間ではなく、あらゆる人間の行為を許容する多様な空間に対応すべきだ。そこで、多様性をもつ単純な箱、あるいは性質の異なる箱の集合を用意すればよいと考える。それが多様な生活を含み、しかも新しい生活を誘発するのである。

木箱と移動装置

単純な箱を自由に振る舞える空間にするために住宅内での移動という行為に注目する。移動は、移動装置である廊下、階段、スロープ、ブリッジにおいて行われる。私の設計する住

宅は木箱と移動装置とから構成されている。多様性をもつ単純な箱を移動装置でつないでいるともいえる。しかし、効率よくつなぐことは考えてはいない。動線を短くし、効率よく部屋をまとめることが計画の常套であるが、むしろ住宅内を自由に動きまわることを意識し、移動する距離を長くしている。移動する行為をエネルギーの損失という意味だけに終わらせず、もっと積極的な意味を見つけなければいけない。空間を理解する有効な方法は、一点にとどまり眺めるだけではなく、実際に移動することにより、空間を体験する場面を多くすることである。移動装置は、移行・上昇・貫通・回転という行為自体を楽しむ仕掛けにしたい。それと共に移動行為自体を視覚化し、人の動きや浮遊感や軽快さを表現したいと思う。

この住宅は親と子の2世帯が住んでいる。3世代の家族は人間関係や生活形態を変えながら長く暮らしていくことだろう。そのときどきに応じて対応できる多様性のある単純な箱を用意した。この住居は変容していく。残念ながらその変容の様は、私の想像の範囲を超えていることだけは確かである。

